期　日　二〇二〇年十月十日（土）・十一日（日）
オンライン開催

日本中国学会　第七十二回大会要項

日本中国学会

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第七十二回大会を、来る十月十日（土）及び十一日（日）の両日にわたり開催いたします。今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、オンラインによる開催となります。日本中国学会として初めての試みであり、皆様には多大なご面倒をおかけすることになりますが、会員の皆様の健康と安全を守りつつ、斯学の学術的発展を期すための選択です。何卒御理解の上、御協力いただけますようお願いいたします。

本年度はオンライン開催につき、大会参加費は申し受けません。大会当日、日本中国学会ホームページ上に開設します特設ページから、所定の方法によって御参加ください。その際に必要となるパスワードは、九月下旬に郵送いたします。なお、パスワードは部外者には知られないよう御注意お願いいたします。詳細につきましては、本要項の「オンライン開催について（オンデマンド方式による研究発表について）」をご確認ください。

敬具

二〇二〇年八月十八日

日本中国学会理事長　金　文京

第七十二回大会準備会代表　髙橋　智

会員各位

日本中国学会第七十二回大会

2020年10月８日（木）～11日（日）

日	時	行　事	開催方式
８日（木）	19：00	**理事会**	オンライン会議（zoom）
９日（金）	19：00	**評議員会**	オンライン会議（zoom）
10日（土）	9：00－18：00	**研究発表** **Ⅰ　哲学・思想部会** Ⅰ－１　梶田　祥嗣 Ⅰ－２　溝本　章治 Ⅰ－３　竹中　淳 **Ⅱ　文学・語学部会** Ⅱ－１　栗山　雅央 Ⅱ－２　王　昊聰 Ⅱ－３　耿　沛涵 Ⅱ－４　金　鑫 Ⅱ－５　盧　旭 Ⅱ－６　陸　穎瑤 Ⅱ－７　呉　雨彤 Ⅱ－８　福長　悠 **Ⅲ　日本漢文部会** Ⅲ－１　王孫　涵之 Ⅲ－２　武　顥	オンデマンド方式 日本中国学会ホームページ （http://nippon-chugoku-gakkai.org/） トップページ「お知らせ」→ 「第72回大会のページ」→ 「10月10日分」（**要パスワード入力**）
		総会	オンデマンド方式 日本中国学会ホームページ （http://nippon-chugoku-gakkai.org/） トップページ「お知らせ」→ 「第72回大会のページ」→ 「総会」（**要パスワード入力**）
11日（日）	9：00－18：00	**研究発表** **Ⅰ　哲学・思想部会** Ⅰ－４　早川　泉 Ⅰ－５　臧　魯寧 Ⅰ－６　吉田　勉 **Ⅱ　文学・語学部会** Ⅱ－９　大井　さき Ⅱ－10　武　茜 Ⅱ－11　金　文京 Ⅱ－12　石川　就彦 Ⅱ－13　小山　澄夫 Ⅱ－14　大久保　洋子 Ⅱ－15　羽田　朝子 Ⅱ－16　福家　道信 **Ⅲ　日本漢文部会** Ⅲ－３　陳　竺慧 Ⅲ－４　横山　俊一郎	オンデマンド方式 日本中国学会ホームページ （http://nippon-chugoku-gakkai.org/） トップページ「お知らせ」→ 「第72回大会のページ」→ 「10月11日分」（**要パスワード入力**）

＊10月８日（木）の理事会および10月９日（金）の評議員会については、10月はじめに学会事務局より参加方法などを当該会員にメールにて連絡いたします。

＊10月10日（土）～10月31日（土）「第72回大会のページ」上に書店・出版社のページを開設します。

研究発表題目一覧

Ⅰ　十月十日（土）

Ⅰ　哲学・思想部会

Ⅰ－1　王安石の「国是」思想――朱熹の「国是」批判を中心に――　梶田　祥嗣（早稲田大学非常勤講師）
司会　井澤　耕一（茨城大学）

Ⅰ－2　朱子『中庸章句』鬼神章の読み方　溝本　章治
司会　垣内　景子（早稲田大学）

Ⅰ－3　霊魂観の相克　――「気」と「個体性」を巡る中西思想対話――　竹中　淳（筑波大学大学院）
司会　永冨　青地（早稲田大学）

Ⅱ　文学・語学部会

Ⅱ－1　班氏父子の賦作に見る「賦」の継承関係について　栗山　雅央（西南学院大学）
司会　谷口　洋（東京大学）

Ⅱ－2　陸機「漢高祖功臣頌」の創作時期について　王　昊聰（九州大学大学院）
司会　齋藤　希史（東京大学）

Ⅱ－3　唐代における神仙イメージの変異の背景――メタファーとしての成立という観点から――
耿　沛涵（東京大学大学院）
司会　土屋　昌明（専修大学）

Ⅱ－4　陳子昂詩の「復多變少」および「庾信體」との關係
金　鑫（京都大学大学院）
司会　松原　朗（専修大学）

Ⅱ－5　詩集十五巻から『白氏長慶集』の詩巻へ
盧　旭（京都大学大学院）
司会　静永　健（九州大学）

Ⅱ－6　『和漢朗詠集』・『新撰朗詠集』所収「暁賦」佚句考――東アジアに流伝した晩唐律賦――
陸　穎瑤（京都大学大学院）
司会　佐藤　道生（慶應義塾大学）

Ⅱ－7　「新劇」から「歌劇」へ――『申報』所載の演劇広告から見た民国初期上海における紅楼夢劇の上演――
呉　雨彤（京都大学大学院）
司会　藤野　真子（関西学院大学）

Ⅱ－8　張天翼「蜜蜂」における民衆運動と科学的言説の問題
福長　悠（日本学術振興会特別研究員）
司会　西村　正男（関西学院大学）

Ⅲ　日本漢文部会

Ⅲ－1　清原家の経学における義疏学の受容――清家証本の記号について――　王孫　涵之（日本学術振興会特別研究員）
司会　水上　雅晴（中央大学）

Ⅲ－2　景徐周麟の「漢高祖賞牡丹」詩について――牡丹愛好と政治批判　武　顥（名古屋大学大学院）
司会　堀川　貴司（慶應義塾大学）

Ⅰ　十月十一日（日）

Ⅰ　哲学・思想部会

Ⅰ－4　漢代象数易の「占」の条件　早川　泉（東京大学大学院）
司会　辛　賢（大阪大学）

Ⅰ－5　葛洪の「行三品説」と実用主義　臧　魯寧（京都大学大学院）
司会　渡邉　義浩（早稲田大学）

Ⅰ－6　皮錫瑞の微言大義説について　吉田　勉（北海道教育大学）
司会　橋本　昭典（奈良教育大学）

Ⅱ　文学・語学部会

Ⅱ－9　慶暦後期における梅堯臣の詩と詩作の場
大井　さき（広島大学大学院）
司会　坂井　多穂子（東洋大学）

Ⅱ－10　恋歌を歌う神女の誕生――志怪における「情」の成立について
武　茜（東京大学大学院）
司会　溝部　良恵（慶應義塾大学）

Ⅱ－11　慶應義塾大學所藏、明夷白堂刊『三國演義便覽』について
金　文京（京都大学名誉教授）
司会　中川　諭（立正大学）

Ⅱ－12　評語から見る金聖嘆本『水滸伝』の会話場面
石川　就彦（慶應義塾大学大学院）
司会　材木谷　敦（中央大学）

Ⅱ－13　『石頭記』の語り　――石頭の「目線」の文体
小山　澄夫（愛知大学名誉教授）
司会　船越　達志（名古屋外国語大学）

Ⅱ－14　一九二〇年代中期郁達夫における文学論の構想と執筆――横山有策『文学概論』などを手がかりに――
大久保　洋子（早稲田大学非常勤講師）
司会　大東　和重（関西学院大学）

Ⅱ－15　梅娘「小婦人」における近代女性像とナショナル・アイデンティティ　羽田　朝子（秋田大学）
司会　大久保　明男（東京都立大学）

Ⅱ－16　沈従文の書簡を読む　福家　道信（元　近畿大学）
司会　濱田　麻矢（神戸大学）

Ⅲ　日本漢文部会

Ⅲ－3　「儒者」はなぜ「詞」を作るのか――昌平黌の填詞趣味について　陳　竺慧（大阪大学）
司会　萩原　正樹（立命館大学）

Ⅲ－4　泊園書院関係碑文にみる藤澤南岳の実業観　横山　俊一郎（関西大学非常勤講師）
司会　町　泉寿郎（二松学舎大学）

発表要旨

十月十日（土）

Ⅰ　哲学・思想部会

Ⅰ－1　王安石の「国是」思想――朱熹の「国是」批判を中心に――

梶田　祥嗣（早稲田大学非常勤講師）

本発表では、朱熹の「国是」論における王安石批判の分析を通じて、王安石が構想した「国是」の解明を試みる。このような迂遠な方法を取るのは、端的に言って王安石は正面から「国是」を唱えなかったためであるが、それ以上に重要なこととして、朱熹によって初めて「国是」の根底にある思想が抉り出されたと考えられるからである。

「国是」は元来、劉向『新序』雑事二を典拠とする、君臣一体の方針を指す語である。だが、北宋の神宗期にこの語が注目されて以降、君臣協働の理念は後退し、反体制派が王安石一派による寡占的な政権運営および言論弾圧を批判する文脈で用いられた。もっとも、神宗自らが王安石を右腕として選び、新法改革を「国是」に掲げたことで、反体制派は公然と「流俗」のレッテルを貼られ、「国是」を批判するほど弾圧されるという構造が醸成されてしまう。「大有為」の君主である神宗と王安石によって開始された君臣体制は、皮肉にも道学系士大夫もロールモデルとせざるを得なかったほど、その後の君臣の在り方を強く規定したのであり（余英時「〝国是〟考」）、政権批判は「国是」以後、より困難となった。

このような王安石一派の寡頭政を単に批判するだけでは有効打とはならない（あるいは皇権の批判につながる）と考えた陳師錫（字伯修）と陳瓘（字瑩中）は、その中核にある王安石の思想を批判すべきと主張したが、効果は限定的であった。朱熹は二陳の論を批判的に継承し、両者による「国是」批判に一定の評価をしつつも、王安石の思想の核心を突くものではないと厳しく糾弾する。

では、朱熹は王安石の「国是」の根底にどのような思想があると考えたのだろうか。また、そこから読み取れる王安石の「国是」思想とは何か、朱熹の「国是」批判を導きの糸として、王安石の「国是」について検証を行いたい。

Ⅰ－2　朱子『中庸章句』鬼神章の読み方

溝本　章治

朱子の鬼神論は、『中庸章句』鬼神章の合理的解釈が注目され、これに一節を当てた論著も多い。これと祭祀的な鬼神との整合性や、理気論上の扱いがよく問題にされる。

そもそも朱子は鬼神章の鬼神を何と見ているのであろうか。鬼神章『或問』には侯氏の言への議論があるが、それによると、「鬼神之德」とは「何か鬼神なるものの有する德」の意味ではなく、端的に「鬼神という德」の意味であるとする。すなわち朱子は鬼神を「德」としているのであるが、このことへの言及が見られないのは問題であろう。鬼神が「德」であれば、仁や義がそうであるように、「理」であっても何ら怪しむに足るまい。

一方、「気」についてはどうであろうか。「気は必ずしも物質を意味しない」との指摘はあるが、では朱子は「気」を何と見ているのであろうか。『中庸章句』鬼神章で朱子は鬼を「陰之霊」、神を「陽之霊」としている。先の例に倣えばこれは「陰という霊妙なはたらき」「陽という霊妙なはたらき」の意味、すなわち「德」に類するものと見ているものと考えられる。「気」とされる陰陽が「德」であれば、「鬼神」もまた「気」とされていて矛盾はない。そして、この注は「鬼神」を「生成」と機械的に読み替えることを暗に指示したものと考えられよう。

近世の思想を、それが「理の哲学」であるか「気の哲学」であるか、あるいは「心の哲学」であるか、といった観点から議論されることがある。この観点自体は否定しないが、このときややもすると脇に置かれがちなのが「德」である。

今回の発表では、『中庸章句』鬼神章を読み直し、合わせて朱子における「德」の問題の外延と、その理気構造について考えたい。

Ⅰ－3　霊魂観の相克　――「気」と「個体性」を巡る中西思想対話――

竹中　淳（筑波大学大学院）

西欧のラテン語文化圏と東アジアの漢文文化圏が初めて直截に接触したイエズス会宣教師の布教活動は、それが最初の本格的な知的接触であったという点で十分に省察する価値がある。とりわけ、フィリップ・クプレ『中国の哲学者孔子』とフランソワ・ノエル『中華帝国の六古典』とは、儒教古典をヨーロッパに紹介した初の本格的な訳書であるという点で重要である。本発表では、井川義次、柴田篤、メイナールといった先行研究のあとをうけ、特に気と霊魂、および祭祀の在り方に注目して、翻訳書と本来の内容との異同を分析する。

中西の存在認識の根本的な差異の一つに、霊魂を含む存在を「気」とみるか「個体」とみるかという差異がある。これについては、すでに存分に論じられている課題であるが、儒教古典が西洋に紹介される際は、翻訳の在り方によって、意図的いかんにかかわらず独自の思想内容へと変質して伝わる可能性がある。意図的というのは、イエズス会の布教戦略として、儒教やその儀礼をカトリックと矛盾しないものとして描出しようとする志向が働いていたことを指す。

特に霊魂の人格性と個体性は、カトリックを含むキリスト教の世界認識の基本をなすものであり、トマス・アクィナスが死後における霊魂の個体性の維持を主張し、神との存在論的な合一を否定して以降、生前、死後かを問わず霊魂の不可分な個体性は西方キリスト教の基本的な教条であった。このような基本的世界観から理気二元論に基づく宋明の儒教を解釈したとき、世界の合理的、非超越論的認識、さらには機械論的認識へと向かう近代的世界観との親和性は大いに高まることになる。

彼らはまたカトリックとの親和性を高めるため張居正の経典解釈を採用したが、それにより彼らの儒教理解は儒教史の観点から見てもヨーロッパを含む後世に影響力ある独自の価値を有するものになったと考える。

Ⅱ　文学・語学部会

Ⅱ－1　班氏父子の賦作に見る「賦」の継承関係について

栗山　雅央（西南学院大学）

班彪（字叔皮、三～五四）・班固（字孟堅、三二～九二）・班昭（字恵班、曹大家、四九～一二〇）父子は、その賦作品が『文選』に採録されることからも明らかなように、漢代を代表する文人一族である。この『文選』所収の班氏父子の賦作の中でも、班彪「北征賦」（巻九）・班固「幽通賦」（巻十四）・曹大家「東征賦」（巻九）については、伊藤正文・原田直枝・釜谷武志氏らによって、これら諸賦作品に対する本文の字句の運用や作品の構成に基づいた分析が展開されている。但し、これらはあくまで各作品間の関係性に対する考察が中心であり、班氏父子の賦作全体へと拡大した研究はこれまでに殆ど見受けられなかった。

本発表は、上掲の班氏父子の賦作品を主な対象として、彼らに共通する特徴を確認することで、実作面での影響関係を明確にすることを目的とする。具体的には、釜谷氏も指摘する「幽通賦」と「東征賦」について、「幽通賦」に施された曹大家注を媒介としてその関係性を全面的に確認する。また、諸作品に共通して作品の結末部分に配置される「乱辞」の比較を通じて、各作品の継承関係を確認する。以上の作業から、班氏父子の賦作を包括的に分析することが可能になると考えている。

以上の考察結果と併せて、上掲の先行研究でも頻繁に言及される劉歆（字子駿、約前五〇～二三）「遂初賦」（『古文苑』巻五）との関連についても、ただ作品間の関係性を確認するだけでなく、彼らの文学創作に対する意識の影響関係をも含めて、劉向が班氏父子の賦作に果たした役割を確認したい。

漢代の賦作の全体像を探ろうとする場合、従来は揚雄の「詩人之賦・辞人之賦」や班固の「賦者、古詩之流」などの概念的評語に基づく傾向が強かった。しかし本発表を通じて、前漢から後漢にかけて賦がどのように形作られていったかを実作面から論証することで、賦文学史研究の更なる充実が図れるものと考えている。

Ⅱ－2　陸機「漢高祖功臣頌」の創作時期について

王　昊聰（九州大学大学院）

西晋の陸機（二六一～三〇三）「漢高祖功臣頌」（『文選』巻四十七）は、漢王朝を樹立した劉邦と彼を支えた功臣三十一人について綴った四言の韻文である。その創作時期については、姜亮夫の陸機の入洛（二八九）以前説、戴燕の元康八年（二九八）説、劉運好の永康元年（三〇〇）説、俞士玲の永寧元年（三〇一）五月以後説、楊明の永寧元年後半から翌太安元年（三〇二）説の五説があり、いまだ定説を見ない。五説は「功臣頌」と「弁亡論」の関連性から考える姜亮夫・戴燕の二説と、弟陸雲の書簡を根拠とする俞士玲らの三説とに大別できる。本発表は、これらの研究成果を踏まえつつ「功臣頌」の内容や表現形式に注目し、この作品がいつどこで創作されたのかについて新たな考えを提出したい。

この「功臣頌」を読んでまず気付くことは、班固『漢書』叙伝との類似である。また功臣の序列についても『漢書』の列伝の順序をほぼ踏襲するように見受けられる。『漢書』は三国時代以来、歴代の皇太子が講授されてきた伝統がある。二九〇年代の西晋恵帝朝において、この「功臣頌」は皇太子司馬遹（二七八～三〇〇）のため、当時太子洗馬として身近に仕えていた陸機が創作した可能性が高い。

司馬遹は後に政変によって皇太子の位を廃され、若くして殺害されてしまう。陸機の作品の繫年考証が困難であるのは、「八王の乱」と言われるこのような西晋末期の政治混乱が関係しているように思われるのである。そこで再びこの「功臣頌」を繙くと、皇帝劉邦を中心に大小様々な王侯権臣が漢王朝の興隆とその後の呂后の乱等内紛を鎮めるために尽力する姿が詠い上げられている。これは創業者武帝司馬炎（二三六～二九〇）亡き後の現実社会を写し出しているかのようである。

本発表では、この「功臣頌」の創作時期を確定するために、皇太子の側近であった頃の陸機の活動について、可能な限り検証に努めたい。

Ⅱ－3　唐代における神仙イメージの変異の背景――メタファーとしての成立という観点から――

耿　沛涵（東京大学大学院）

中唐における神仙イメージの変異をめぐる研究はすでに一定の蓄積があり、「神仙凡人化」や「仙境現実化」などと言われているが、そのような変異の原因についてはまだ充分に検討されていない。

初唐において神仙に関する語彙や典故が最も多く使われたのは応制詩である。ただし、応制詩に神仙が登場することは太宗朝に初めて出現したのではない。南北朝からすでに、「応制」という場では、「神鑣」などの語彙がたんなるマーカーとして皇帝、あるいは皇室を標記するために使われる、というルールが定着していた。

太宗朝までは、応制詩の場は多く宮廷にあり、比較的単一だったと言えよう。時代が下ると制作の場は次第に増えて、久視元年には武皇が嵩山を訪れて応制詩が作られる。応制の場所が宮廷から道教洞天に変化し、また唐皇室が老子の後裔という特殊な身分を主張したため、実質的な意味を持たないマーカーとして使われた神仙に関する語彙が元来の「神仙」の意味を備えるようになり、皇室を描写するためのメタファーとして機能し始めた。同時に、神仙というメタファーを使って皇室を描写するというルールも固定されてゆく。

中宗朝の応制詩は公主の園林をめぐるものが多く、自然風景と金殿玉樓を強引に結びつける傾向にある。「桃花春接九重殿」という矛盾した仙境の描写も、応制の場で皇室を描写するには「神仙」のメタファーを使わざるを得ないルールが背景にある。

従って、先人が指摘した中唐における神仙イメージの変異も、詩作の場における「神仙」というメタファーが機能する対象や使われる体裁などの拡大によるものではなかろうか。すでに中宗の時代に応制の場で成立した神仙のメタファーが、後の時代に応制という場を超えて広い範囲で使われるようになり、より顕著な変化として表れたと考えられるのである。

Ⅱ－4　陳子昂詩の「復多變少」および「庾信體」との關係

金　鑫（京都大学大学院）

初唐の陳子昂は文學復古の代表として知られ、その詩は中唐の皎然によって「復多くして變少なし」と評された。後世の論者たちもまた、專ら漢魏の古詩に倣い、齊梁以來の「四聲八病」の規則を排する點に注目し、盛・中唐の古詩を導くスタイルと見なした。

しかし、陳子昂詩の聲律を仔細に調査し、漢魏や盛唐の古詩と比較すれば、如上の説には必ずしも首肯できない。たとえば彼の全詩百二十七首のうち、律詩は五十三首を占める。それ以外の古詩とされる作品にも律聯や對句がかなり混在し、しかも「八病」において最も重要な「上尾」を避けている。つまり、古詩というより古詩と律詩の間に位置する存在といってよい。陳子昂の代表作「感遇」三十八首もこうしたタイプの詩である。その模擬對象である阮籍「詠懷」、および同じ系譜に連なる北周・庾信「擬詠懷」二十七首、盛唐・張九齡「感遇」十二首、李白「感遇」四首、「古風」五十九首と合わせて、律聯の比率と「上尾」を避ける情況を調査してみると、「感遇」三十八首は明らかに阮籍や盛唐人の作とは異なり、むしろ庾信の作に近似する。このように、陳子昂の詩には古詩とも律詩とも異なる特殊な聲律形式を踏襲した例が散見され、實際に「庾信體（小庾體）」に倣った作品もある。また、庾信晩年の「凌雲健筆」と稱される詩法を大いに參考にした痕跡も窺える。

以上を要するに、「徐庾に至りて、天の將に斯文を喪さんとするなり」（唐・盧藏用「陳伯玉文集序」の語）という先入觀に囚われて、陳子昂の詩風と「庾信體」の關係を考察するのは妥當ではない。陳子昂は漢魏古詩の精神を受け繼ぐと同時に、「四聲八病」の聲律論や「庾信體」の形式をも積極的に取り入れていた。その詩には確かに復古の面がある一方、創新の面も決して看過することはできないのである。

Ⅱ－5　詩集十五巻から『白氏長慶集』の詩巻へ

盧　旭（京都大学大学院）

白居易は生涯を通じて自らの詩文集を整理、編集し続けた。その始まりは元和十年（八一五）に成立した詩集十五巻であり、後世に伝わる成果として長慶四年（八二四）成立の『白氏長慶集』五十巻がある。

『白氏長慶集』は元稹の手によって完成されたが、元稹の編集はまったくのゼロから着手したわけではなく、白居易が元和十年（八一五）以来整理し続けた詩巻に基づいたものである。従来の研究の多くには、編集者としての元稹の存在を軽視する傾向がある。しかし、すでに『元氏長慶集』を編集した元稹がその経験や理念を『白氏長慶集』の編集作業に用いたとしても怪しむに足らないであろう。

本発表の目的は、『白氏長慶集』の詩巻二十巻、特に古体詩の巻を手がかりとして、詩集十五巻以後の白居易自身による詩作整理とその理念、および『白氏長慶集』において元稹が行った編集作業とその方針を探り、両者の相違点を明らかにすることである。

「與元九書」に提起された諷諭・閑適・感傷・雑律の四分類は、詩集十五巻本のみに適用される。白居易の江州時代の詩は、主題が近似しており、分類上の境界が曖昧になったが、白居易はこの時期の詩作を整理する際、依然として四分類を用い続けた。その後、忠州時代から杭州時代に至るまでの古体詩では、制作時期によって二巻に分けられる。ここに至って、四分類は事実上崩壊した。

ところが、長慶四年（八二四）、元稹が白居易の詩文集を編集するに当たり、四分類を維持しようとした。元稹は、江州以後の二巻分の古体詩を、おおよその風格によって「閑適」、「感傷」に分けたが、たとえ個々の詩の分類が不自然であっても調整してはいない。それゆえ、後世の読者に『白氏長慶集』の分類が混乱している印象を与えた。その他、元稹は巻数や各巻の紙幅の均等性を高めるために、詩の配列を調整したり、一部の詩巻を二分割したり、分割したものを併合したりして、詩文集全体の形式美を追求したと考えられる。

Ⅱ－6　『和漢朗詠集』・『新撰朗詠集』所収「暁賦」佚句考――東アジアに流伝した晩唐律賦――

陸　穎瑤（京都大学大学院）

一条朝に編纂された『和漢朗詠集』、その和漢佳句を合わせて収録するスタイルを受け継ぐ『新撰朗詠集』には、いくつかの唐賦が収録されている。これまで川口久雄・大曽根章介両博士をはじめ、両朗詠集所収唐賦佳句に関する研究がなされてきたが、推論にとどまっていまだに解決されない問題点も多くある。出処を「暁賦」と記される佳句を例にすれば、賈嵩作の一句を除いて、残りの六句の作者が謝観なのか張読なのか定められない。また、「暁賦」本文の実態、すなわち『和漢朗詠集』所収のものと『新撰朗詠集』所収のものとがはたして同じ作品の句か否かもはっきりせず、両朗詠集研究において懸案の一つとなっている。

一方、朝鮮の漢文文献を探ると、崔国述が新羅の文人・崔致遠の詩文を輯佚し、一九二六年に刊行した『孤雲先生文集』の巻一に収められる「詠暁賦」に注目すべきである。「暁賦」より採録したと注記される『和漢朗詠集』の四つの佳句、『新撰朗詠集』の二つの佳句は、この「詠暁賦」の句とは文字の異同があるけれども、それぞれ極めて近似しており、同じ作品であると考えられる。また、南宋期の陳元龍が周邦彦の詞集に注を施した『詳注周美成片玉集』にも「詠暁賦」の佚句が四ヶ所見られるが、唐末の文人・呉融の作とされる。

「暁賦」の作者に関する日中韓文献の諸説を検証すると、やはり中晩唐期を生きた謝観という文人が作者である可能性が最も高いと思われる。晩唐の律賦は東アジアに広く伝わり、渤海国・新羅にもたらされ、日本に舶来した後は朗詠の材料となり、両朗詠集に収録されるに至る。「暁賦」の流伝及び晩唐律賦の享受の実態を手がかりにして、古代東アジアにおける漢文学交流の一斑を窺うことができる。

Ⅱ－7　「新劇」から「歌劇」へ――『申報』所載の演劇広告から見た民国初期上海における紅楼夢劇の上演――

呉　雨彤（京都大学大学院）

民国期の紅楼夢劇は上海を重要な舞台として、一九一三年に話劇の嚆矢とみられる「新劇」から徐々に幕を開けた。新民社、春柳劇場・新劇同志会をはじめとする新劇団体が数多くの紅楼夢劇を創作して上演し、一時的に盛んになっていたが、一九一五年に入ってからそれぞれ合併や解散の結末を迎え、上海での紅楼夢劇の上演も新段階に移行した。

この時期、紅楼夢劇の変革を実行した主導者が欧陽予倩である。春柳劇場・新劇同志会で新劇に努めて紅楼夢劇を大量創作して演じた欧陽予倩は一九一五年四月に第一台で京劇役者としてデビューし、約一か月後また春柳劇場に戻り、「古装歌劇」の試みである『黛玉葬花』をはじめて演じた。それを始まりとして、一九一六年以降、すでにプロの京劇役者となった欧陽は当時一流の劇場とされた第一台と笑舞台を遍歴し、「歌劇」という概念を作り上げて『寶蟾送酒』などの紅楼夢劇を続々と自ら創作して上演した。

これらの作品には、欧陽予倩の歌劇との新しい演劇形態を創造する試みが画期的に見える一方、その誕生の裏に欧陽の個人的な趣味や演劇改革の志のほか、新劇の隆盛期から衰退していく傾向にも注目したい。当時上海において紅楼夢劇の第一人者と言える欧陽予倩が役者として「新劇家」から京劇役者へ転換したことも、民国初期に紅楼夢劇が新劇から歌劇へと歩む道のりに大きく左右したと考えられる。

なお、欧陽の紅楼夢歌劇が人気を博したことを背景にして、当時の劇評に歌劇という創造に対する異議も見える。『申報』に掲載される演劇広告を中心として、同時代の記述や批評などを掲載していた雑誌なども参照し、「歌劇」という概念の誕生から消えるまで遡り、欧陽の紅楼夢歌劇の上演実態も探究してみる。

Ⅱ－8　張天翼「蜜蜂」における民衆運動と科学的言説の問題

福長　悠（日本学術振興会特別研究員）

張天翼は一九二〇年代に文壇に登場し、左翼文学や諷刺文学、童話の領域で活躍した作家である。習作期には鴛鴦胡蝶派や象徴主義にも接近し、その文学的営為については多大な検討の余地が残されている。

本発表では、張天翼が一九三二年に発表した短編小説「蜜蜂」を取り上げる。本作品は農村の少年が姉に宛てた手紙の形で、農民と養蜂業者の対立を描く。主人公たち農民は、養蜂場の蜂が稲に害を与えていると主張し、県に請願に赴く。交渉は決裂し、農民たちは養蜂場を襲撃し多数の逮捕者を出す。テクストには少年の語りによる自由闊達な口語表現が見られる一方で、多数の誤字や文法上の誤りが見られる。

「蜜蜂」の題材をめぐっては、発表直後に批判が寄せられた。曹聚仁は、蜜蜂は稲作に無害であると指摘し、張天翼が無錫の養蜂業者襲撃事件に題材を得たと推測するが、その事件は養蜂業者と土豪劣紳の対立であり、農民は無関係であるとする。しかし、当時の養蜂業や民衆運動をめぐる状況が、作品内にいかに現れているかについては、いまだ検討の余地が残されている。

本発表では、当時の新聞報道および農業関連の雑誌から、一九三〇年代における農民と養蜂業者の対立の実態を探る。特に一九三一－三年に浙江省で起きた暴動が小説の記述と多くの点で重なることを指摘する。当時の農民は蜜蜂の群れという未知の存在に対して往々にして反感や恐怖を抱いたが、養蜂に関する知識はいまだ浸透せず行政の対応も場当たり的であった。反対運動の広がりは科学的知識と安全性をめぐるリスク・コミュニケーションの問題を示唆し、「蜜蜂」のテクストは科学をめぐる民衆と権力の言説のねじれから読み解くことが可能である。「蜜蜂」の主人公たちは規範的な言語からの逸脱も含めた言語遊戯によって権力を諷刺し批判するが、体制への異議は最終的に実を結ぶことがない。テクストからは民衆と権力の間の言語的、言説的な断絶が読みとれる。

Ⅲ　日本漢文部会

Ⅲ－1　清原家の経学における義疏学の受容――清家証本の記号について――

王孫　涵之（日本学術振興会特別研究員）

清原家は、平安中期以降、明経博士を世襲するようになり、儒教の経典を修めて経書の講義をすることを代々家業としていた家系である。他の博士家のような断片的な伝承ではなく、多くの点本や抄物が残されており、いまでも家説を再現できるのは清原家だけである。これらの文献資料を利用することにより、古来朝廷で行われてきた儒学教育の詳細を窺い知ることが可能となる。

清原家の経学を知るにあたっては、経書の経注をこまめに校定して書写し、累代相伝の訓法・秘説を忠実に移写した家の証本が言うまでもなく中心的な資料である。今までの研究は、清家証本の版本の価値に注目していたが、証本の背後にある清原家の学問体系には、あまり言及していない。現存する清家証本を見ると、義疏から抜粋した書入れのみならず、経注本に対応する義疏の巻数を示す記号が、全巻にわたって存在する。例えば、「正一、正二、正三」は『五経正義』の巻数を示し、「疏一、疏二、疏三」は『礼記子本疏義』や『孝経』元行沖疏の巻数を示す。他にも、義疏による経文の科段を示す記号もある。清原家の経書講義においては、注だけでなく義疏の解釈も重要な位置を占めていたと言えよう。

本発表は先行研究を踏まえた上で、清家証本の記号を分析しながら、清原家の経学における義疏学の受容を論じたい。具体的には、第一に、現存する清家証本を概観し、各経書の講義に使用された義疏を整理する。第二に、『礼記子本疏義』の分巻と『毛詩正義』の科段を例として、清家証本の記号の資料価値を明らかにする。第三に、義疏の解釈を重要視する清原家の経学と、古来の大学寮の学風との関係を検討する。

Ⅲ－2　景徐周麟の「漢高祖賞牡丹」詩について――牡丹愛好と政治批判

武　頴（名古屋大学大学院）

室町時代後期の五山僧景徐周麟の詩作では、牡丹が多く詠まれている。そこには牡丹の特徴である高貴さ、国色天香のイメージもさることながら、当時の禅林における牡丹鑑賞の風潮も窺える一方、また、楊貴妃、漢の高祖など歴史人物を詠出する詩も目立ち、五山禅僧らにある政治参与や批判という士人的態度も見られる。これら景徐周麟の詩作の中から、特に「漢高祖賞牡丹」という詩に注目したい。

五山文学において、牡丹のイメージは特に後期の景徐周麟、万里集九、末期の策彦周良などの作品に目立つ。これらの牡丹を詠む風潮を遡ると、まず、中国の唐代からの牡丹の文学的形象の出現、さらに北宋中期の文人ら、特に欧陽脩の「洛陽牡丹記」による牡丹の鑑賞風潮であり、文学における牡丹のイメージも多様化した。その牡丹は日本においても、特に室町時代、足利義政による東山文化の発達によって、当時の連歌会や、禅林における仏教、文学活動などにおいて牡丹を含む花卉鑑賞が盛んとなったため、五山僧の作品にも、牡丹が頻出しているのである。

景徐周麟の「漢高祖賞牡丹」詩は、「高祖率兵遊洛陽。牡丹何幸沐恩光。禍根他日生諸呂。不伐花中異姓王。」という七言絶句である。高祖は確かに洛陽に行っているが、牡丹を観賞したという記載は他になく、まずどうしてそのように詠んだのかという謎を解明しなくてはならない。そして、中国詩でもよくあるように、これは、漢高祖に仮託した、現状の政治批判でもあろう。応仁の乱を経験した五山後期の僧である景徐周麟の作品には、女性が政権盛衰に与える影響を主題とする詩作が多く、この詩の「花中異姓王」という表現も、呂后ら呂氏一族の専横を用いて、日野富子を批判している可能性がある。

五山禅林において詠史詩は儒家的な価値観で詠まれてきた。「漢高祖賞牡丹」詩を読み解くことで、景徐周麟ならではの政治批判詩の作り方と士人的な態度について明らかにしたい。

十月十一日（日）

Ⅰ　哲学・思想部会

Ⅰ－4　漢代象数易の「占」の条件

早川　泉（東京大学大学院）

一般に、漢代の象数易は神秘的で迷信的、魏の王弼以降の義理易はもっぱら人事の倫理を以て『周易』を解釈すると言われる。それはもちろん歴史的に根拠のあることだが、しかし神秘的かつ迷信的という占いへの傾斜は、象数易の学風そのものと必然的な関係を持つものだったのだろうか。

朱熹は、王弼以降もっぱら義理のみによって『周易』経文を解釈しようとする学問的風潮を批判し、「易はもと占筮の書」であると喝破した。これも全く正当な論評であるが、疑問がないでもない。すなわち、王弼以降の義理易が占筮を排したのは、その学風のしからしむる必然だったのか、ということである。

本発表では「占う」という実践の中で実際に何が行われているのかを検討しながら、象数易の学風と占いへの傾斜の間の関係性を問う。私見では、ある程度形式の整った占いの多くは、占われる者に対して道徳的教訓を与え、その行為を戒める機能をその核心としている。これは古くは『国語』『左伝』などにおけるごく初期の『周易』解釈にも同様にみられる要素である。これは決定された未来を一方的に人に告げる各種の予言との重要な差異である。ところが易解釈の傾向から言えば、人間の道徳性や行為を『周易』から直接に引き出すのはむしろ義理易のほうである。逆に、象数易が主題的に扱う（陰陽の気を含む）自然物のイメージから教訓を引き出すばあい、なんらか別の規則による自然物の道徳化が明に暗に行われているはずであり、その部分こそが占にとって不可欠なものだと言えるだろう。この「自然物の倫理化」という点に着目し、象数易のいかなる部分と他のいかなる要素の融合が一般的な「象数易」のイメージを形作っているのかを整理してみたい。

Ⅰ－5　葛洪の「行三品説」と実用主義

臧　魯寧（京都大学大学院）

葛洪の『抱朴子』外篇の行品篇において、多くの人間像が描かれ、分類されている。その分類が性三品説に通じると指摘されている。しかし、本稿で検討していくように、両者の間には少なからぬ相違点が存在する。本稿はまずそれを手がかりに、その相違点を明確にし、葛洪の人間観念の特徴を浮き彫りにする。さらに、内篇をも視野に入れ、葛洪の政治思想と仙道理論において、その人間観念がいかなる意味を持つのかを論じ、その思想史的系譜について卑見を述べる。

第一章「葛洪における「性」では、内外篇に見える「性」の意味を検討し、葛洪は「性」について論理的思考が欠けていることを指摘する。葛洪は人間の先天的な「性」に相違があることを認めるが、具体的な性論を展開しておらず、「性」の善悪についても言及していない。

第二章「行品篇に見える「性論」では、行品篇を分析することによって、その人間の分類の構造が性三品説に通じるところを指摘する。ただ、次の節で検討するように、葛洪の人間の分類法は単に揚雄や王充の性説を模倣するものではない。

第三章「「善（上智）・悪（下愚）」について」、第四章「「下人」・「中才」について」では、行品篇の分類における個々の概念を具体的に検討し、人間の価値判断に際し、葛洪は独自の基準を持つこと、その分類は形式上において性三品説を変形したものであるが、実は「性論」ではないことを述べる。

第五章「葛洪における「行」」で、上記の点を踏まえ、焦点を「行」に当て、葛洪は「行」や「事」を中心に人間の善悪を区別していることを指摘する。換言すれば、行品篇の内容は形式上の「性三品説」の変形ではなく、「行三品説」である。

第六章「内外篇における実用主義」において、実用主義は『抱朴子』内外篇に通底するものであることを示す。内篇では、葛洪の実用主義は、実践的な仙道理論として現れ、一方、外篇では、いわゆる賢才主義という形で現れている。

Ⅰ－6　皮錫瑞の微言大義説について

吉田　勉（北海道教育大学）

梁啓超『清代学術概論』（一九二〇）や、支偉成『清代樸学大師列伝』（一九二四）が指摘するように、清代の今文学派は、訓詁名物を捨て、専ら「微言大義」の探究に努めたとされる。そのような清代の今文学者のうち、清末・湖南の皮錫瑞（一八五〇～一九〇八）の微言大義に対する定義は、とりわけ広く知られたものと思われる。

皮錫瑞は、その『春秋通論』において、『孟子』の記述によりつつ、「微言」を「法制を改立して以て太平を致す」こと、「大義」を「乱賊を誅討して以て後世を戒むる」ことと規定しているが、この説は、狩野直喜（『春秋研究』、一九九四。原講義一九一一～一九一二）・小島祐馬（「公羊家の三科九旨説」、一九二一）等に祖述されており、また近年でも、黄開国（『清代今文経学的興起』、二〇〇八）や曽亦・郭晩東（『春秋公羊学史』、二〇一七）が、皮説に基づいて清代今文学や公羊学の発展史を描いている。このように、従来、皮錫瑞の微言大義説は、今文学派を代表するものと見なされてきた。

しかしながら、その一方で、皮説によって今文学派を代表させることが慣習化したために、その特徴や、他の今文学者の説との相違は、見過ごされがちであった。発表者は、皮錫瑞の日記（『師伏堂日記』）をはじめ、『南学会講義』『師伏堂春秋講義』といった著作から、晩年の『春秋通論』の説が形成された背景には、梁啓超（一八七三～一九二九）との交友や、葉徳輝（一八六四～一九二七）との論難が想定されると考えるに至った。本発表では、上記の資料を引用しながら、皮錫瑞の微言大義説の形成過程を明らかにしたい。その上で、皮説の持つ特殊性を指摘し、それが今文学派の最大公約数としてでなく、あくまでも彼独自のものとして見なされるべきことを論じたい。

Ⅱ－9　慶暦後期における梅堯臣の詩と詩作の場

大井　さき（広島大学大学院）

本発表では、仁宗の慶暦年間（一〇四一～一〇四八）後半における梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）の交友関係に着目して、その詩を分析する。

慶暦四～八年（以下「慶暦後期」）の作には、これまで指摘されてきた梅堯臣詩の特徴のひとつ、日常生活の細部に目を向けるという点が顕著に現れ始める。表現面でも、唐までに形成された詩の定型から外れていこうとする意識が作中に窺えるようになる。

慶暦四年秋からの数年間にはまた、梅堯臣の活動拠点が都及びその周辺に移り、他の知識人たちとの交流が活発になる。新たに関係をもった人物も多い。先行研究にすでに言及される通り、この頃作られた詩の中には、詩に対する考えを述べた重要な言説が集中して現れるが、それらの詩を贈られたのは、主として慶暦後期、あるいは少し前から交流が始まり、盛んに往来した人物たちである。詩に変化をもたらした要因のひとつに、彼らとの交際が想定できるだろう。

発表者はすでに、梅堯臣の聯句について分析を行い、慶暦後期の作には競作的態度が見受けられ、自身の作の受け取られ方に対する配慮や、相手の用いた技巧に応対しようという意識が、作中の表現に大きく影響を与えていることを確認した。聯句以外の作についても同様に分析を加えることで、聯句を分析して得られた結論をもう少し一般化できるのではないかと考えている。

そこで今回は、慶暦後期に盛んに交流があった人物たちとの応酬を分析し、この時期の詩作の場が梅堯臣にどのような表現を生み出させたのかについて、検討していく。少数ながら交流相手に梅堯臣と唱和した作が残る場合もあり、創作時の詩人の狙いを探る手がかりになるだろう。その上で、彼らとの詩作が梅堯臣の詩をどのように変え得たのか、人との関わりが梅堯臣の文学を具体的にどのように変え得たのか、考えてみたい。

Ⅱ－10　恋歌を歌う神女の誕生――志怪における「情」の成立について

武　茜（東京大学大学院）

唐伝奇における女性像に関する研究では、よく注目される問題の一つは「仙妓合流」現象である。即ち唐伝奇に登場する神女は往々にして情熱的且つ能動的に人間男子と恋をするイメージである。こうした唐伝奇に見られる神女像の独自性についての論述では、六朝志怪に登場する神女との比較がされることが多く、そして後者はより冷淡な存在だという見解が一般的である。例えば詹丹氏が「仙妓合流現象探因――唐代伝奇愛情片論之二」（『西安教育学院学報』、一九九七年第三期、一一－一七頁）では六朝志怪において倫理的と宗教的な神女が主流であり、いずれも情的に淡泊な存在だと指摘している。

しかし問題となるのは六朝志怪から唐伝奇へと、こうした神女像の変化はいつ、どのように発生したのか、そしてそこにどんな社会現実が映し出されているのか、ということである。このことを論じるためには、「奇」を記す世界において「神女」の本質とは何かをまず明らかにする必要がある。神女たちの歌う韻文は、その有効な手がかりになると考えられる。

小南一郎氏は「漢武帝内伝の成立（上）」（『東方学報』、一九七五年第四八期、一八三－二二七頁）では成公智瓊の降神説話をはじめとする神女降臨譚を考察し、これら神女と人間男子の交渉は本質的に神女と巫覡との宗教儀礼のための擬制的婚姻関係だと指摘し、更に文芸化された散文とは違い、神女が歌う韻文に本来の威厳のある面影が残されているとする。つまり元来神婚説話の核心は恋愛を目指すものではないため、神女の詩歌も恋歌ではなかったが、『遊仙窟』をはじめとする唐伝奇に至ると、詩歌によって恋心を訴える神女が多く見られるようになった。このことから、志怪から伝奇へと発展する過程で神女の本質に変化があったことがうかがえる。

そこで、本発表では神女の歌う韻文を糸口に、神女像の変化原因を考察することで「史」を記す志怪における「情」の目覚めを探究したい。

Ⅱ－11　慶應義塾大學所藏、明夷白堂刊『三國演義便覽』について

金　文京（京都大学名誉教授）

明・武林（杭州）夷白堂刊『新鐫通俗三國演義便覽』（題は巻四首題による）二十四巻（存二十巻）は、他に所藏の知られない天下の孤本であるだけでなく、袖珍本（小型本）であり、また「徽郡原板」（巻二十一）と銘打つ點（類例に内閣文庫蔵『新鐫徽郡原板校正繪像註釋便覽與賢日記故事』がある）、さらに現在の中國での通稱である『三國演義』（元来『三國志』の「演義」なので、「志」がなければ意味をなさない）という書名が見える點で、明代の『三國志演義』または白話小説テキストとして特異かつ貴重な存在である。テキスト内容は南京の周曰校刊本の系統であるが、周曰校刊本が十二巻であるのに対し、本書は嘉靖本と同じ二十四巻で、かつ本来なら全二百四十回を、各巻十回均等に収めるべきところ、各巻の収録回数が不均等で、しかも複数の回を一つにまとめている場合があり、實際には最多でも二百十八回しかなく、この點もきわめて異例である。

夷白堂は、杭州の文人作家兼書商、楊爾曾の堂號で、楊爾曾には『仙媛紀事』、『圖繪宗彝』、『海内奇觀』、小説『韓湘子全傳』、『東西晉演義』などの著書があり、また萬暦年間後半に『吳越春秋注』、『狐媚叢談』『許真君淨明宗教錄』などを刊行、特に『海内奇觀』などの版畫には徽州の刻工を用いたことで知られる。徽州の文人、黄鳳池編『唐詩畫譜』にも、夷白堂、楊爾曾の名が見える。

慶應義塾大學圖書館は最近、本書の修理改装を終え、HP上で公開の予定であり、中國の國家圖書館出版社も影印本を出版する計劃である。本大會の場を借りて、本書の概要を紹介したい。

Ⅱ－12　評語から見る金聖嘆本『水滸伝』の会話場面

石川　就彦（慶應義塾大学大学院）

明代長篇白話小説『水滸伝』の版本のうち、とりわけ明末清初の金聖嘆の手による「金聖嘆本」には数多くの本文の改変と評語が認められ、それらは会話場面にも及んでいる。そしてそれらの改変状況や評語内容を紐解くことは、金聖嘆の批評思想及び批評技法の一端を垣間見ることに繋がる。

金聖嘆が会話場面に着目していたことは、「人有其聲口（人物にはその人物の声がある）」（「序三」）、「一様人便還他一様説話（同じ人には同じように話させている）」（「読第五才子書法」）と述べていることからも分かる。金聖嘆の評語には会話場面に対する具体的な指摘が溢れている。

金聖嘆の会話場面に対する改変・評語は大きく三つの系統に分類されると考えられる。一つ目は、会話場面の臨場感の増幅を目指すものである。ある発話文に別の発話文や動作描写を挿入する「夾叙法」を用いて同時発生する発話や動作の表現を目指したり、人物像との整合性を高める改変を施したりといった例が散見される。また、発話文の読み方（緩急の付け方）を読者に指示する評語も存在し、作品読解における評語の価値の高さが窺える。二つ目は、物語の構成を強く意識したものである。離れた発話文の呼応を意識した「対鎖作章法」などによる近似場面での発話文の統一、伏線の設置とその回収など、読者にまで物語のプロットを意識させようとする傾向が認められる。三つ目は、金聖嘆の価値観が発話文の改変に表出しているものである。金聖嘆の作中人物に対する評価が発話文の改変に大きく影響している場面は散見され、人物評価に基づいて人物像の強調を目指したと考えられる。

本発表は金聖嘆本の会話場面に附せられた評語と改変状況をもとに、これまであまり重点的に取り上げられることのなかった金聖嘆本における会話場面の扱われ方や、作品上の効果、そして金聖嘆による価値認識の考察を試みることを目的とするものである。

Ⅱ－13　『石頭記』の語り　――石頭の「目線」の文体

小山　澄夫（愛知大学名誉教授）

周知のように小説『紅楼夢』の原作『石頭記』は、石頭が自らの経験を物語る形で記される。石頭自身の言葉を借りるなら「親睹親聞」、すなわち「見たまま」「聞いた通り」の文体で記される。比喩としてではなく、実際作者は「語り手」の生きた目線を殺さないよう知恵の限りを尽くしている。一例を挙げれば、通俗小説では情景描写に「見」なる動詞が常用されるが、『石頭記』では従来の小説のような人間不在の「見」が一切現われない。かならず誰が見ているのか明瞭な「目線」で統一され、作中石頭の「目線」を基本としながら、場合により登場人物に乗り移り、人から人へも乗り移る。したがって読者は、語り手とともにその場に立ち合わされる絶妙の臨場感につつまれる。「生きた目線」であるから「神の視点」とは異なる。花が邪魔になったり、逆光で見えにくかったり、見えないものを見えないとする言わば「謫仙の目線」である。作者はこの筆法に余程自信があったらしく石頭に「通霊」の名まで授けている。にもかかわらず、清代の紅学者をはじめ今日に至るまで、この画期的な文体を真正面から取りあげるのは脂硯斎ただ独り。少なくともこの文体が全百二十回にわたって一貫している事実は、無視されてはならない重要事である。かりに全篇が作者ないし作者の身辺者の筆に成るものとするなら、後半部の大幅な改作のなかで石頭迷失という筋立ての導入にともない、石頭の語り手としての立場再考を余儀なくされ、小説第一回の書き換えとともに『石頭記』から『紅楼夢』への書名変更が図られたのかも知れない。この文体問題は我々に様々な課題を突きつける。まずは脂硯斎評語の読み直し。清末翻訳小説による「神の視点」伝播以前の「目線の文体」の影響力の検証。小説作法書としての李漁『閑情偶寄』との関連。さらにセリフに描かれた「人情の清濁」と同時代の戴震『孟子字義疏証』との照合など、残される検討課題を指摘してみたい。

Ⅱ－14　一九二〇年代中期郁達夫における文学論の構想と執筆――横山有策『文学概論』などを手がかりに――

大久保　洋子（早稲田大学非常勤講師）

郁達夫（一八九六～一九四五）は一九二五年初頭に武昌へ赴任、一年足らずを同地で過ごした。この頃に書かれ、のちに単行本化された文学論諸篇は、前・後期創造社時代に挟まれた二年間における郁の文学活動を知るうえで数少ない資料である。このうち一部については、夏目漱石、有島武郎、木村毅との影響関係が既に指摘されている。だが多くの論考で郁の記述は参考文献を引き写した売文目的のものとされ、テクストの詳細な比較検討は行われてこなかった。郁が諸篇の巻末で挙げた参考文献についてはほぼ未開の領域である。

近年は従来の評価を見直す動きがあり、発表者もこれまで、『文学概説』（二七）における有島の影響の深度と幅を検証する試みを行い、郁の有島受容には確かな文学観に基づく取捨選択があったことを明らかにしてきた。本発表はこれらの成果と現状を踏まえ、引き続き郁の文学論について調査したものである。

「村居日記」（二七）等の資料によると、同年頃郁はまとまった文学論の執筆を計画しており、二五～二六年に発表した諸篇はその土台となるものであった。郁の構想は二〇年代半ば以降の中国における文学論出版ブームの流れの中に位置づけることができる。単行本化にあたる細かな字句の推敲や各篇の発表時期の違いは、郁が一定の目的と意図を持って文学論執筆にあたっていたことを示している。

郁の文学論は、『文学概説』の参考文献でその名を挙げた日本の英文学者横山有策（一八八二～一九二九）の『文学概論』（二一）に多くを拠っている。横山の影響は『文学概説』をはじめ、その名が記されていない他の文学論においても重要な位置を占め、従来他の文献の影響とされてきた部分についても、横山の陰を見ることができる。

本発表では、郁の文学論における横山受容の様相を探り、さらに郁が挙げた他の参考文献との比較を通して、郁の文学論執筆の構想とその特徴の一端を明らかにしたい。

Ⅱ－15　梅娘「小婦人」における近代女性像とナショナル・アイデンティティ

羽田　朝子（秋田大学）

梅娘（一九一六～二〇一三年）は満洲国で活動を始め、一九四〇年代に日本占領下の北京で文壇を代表する女性作家として活躍した。一九四四年の大東亜文学者大会に関わったことから戦後長らく注目されてこなかったが、一九八〇年代に日本占領地に対する捉え直しが始まると、その文学は日本の支配や男性中心社会への批判を描き出したとして再評価された。しかし戦争末期に日本主導の文化政策に関与した梅娘の矛盾した精神については未だ不明な点が多い。

これを解明するために、本発表では梅娘の長編小説「小婦人」（『中国文学』一九四四年一～一一月）に着目する。先行研究では、この作品に駆け落ちをして結ばれた夫婦のうち、夫の心変わりによって妻が苦しめられる姿が描かれることから、男性中心社会への批判を描いたものと見なしてきた。

これに対し本発表で注目したいのは、「小婦人」が夫婦のうち妻の視点だけでなく夫である男性の視点、そして夫婦の仲を裂く愛人の視点からも描かれていることである。とくに愛人はモダンガールとして描かれており、男性が質朴な妻とモダンな愛人との間で揺れ動く心情が詳細に描かれている。そして男性にとって男女の愛情は社会への奉仕と密接に関連したものとして描かれており、彼はあるべき愛情を求めて北京から満洲国、そして日本へと越境するのである。

これを踏まえ、本発表ではまず梅娘作品における近代女性像の系譜を検討する。梅娘作品ではモダンガールは新女性や職業婦人、良妻賢母とともによく登場する形象であるが、先行研究では注目されてこなかった。そのためモダンガールの形象を中心に梅娘が描く女性像について再検討する。

その上で「小婦人」に描かれた対照的な二つの女性像と両者間で揺れ動く男性の心情を分析し、そこに表出された占領下の近代知識人の複雑なナショナル・アイデンティティを考察する。

Ⅱ－16　沈従文の書簡を読む

福家　道信（元　近畿大学）

沈従文全集三十二巻のうち十八巻より二十六巻まで九巻が書信であって、沈従文は生涯に膨大な分量の手紙を書いた。手紙は彼の文学と人生を考えるうえで複数の側面において重要であるが、特に一九四九年の自殺未遂以降、精神失調の治療期間を経て建国時期の思想学習を受け、やがて土地改革に参加し四川省内江県で農村の生活を体験する時期の書簡は、病気からの治癒、生命の肯定、建国時の国家と人民にたいする自己の立場と役割、妻との対話、新世代として成長する息子への助言と訓戒等々、彼の社会復帰と新たな人生のスタンスを示し、極めて興味深いものが有る。張新穎、王徳威らの研究がそれぞれ指摘するように『狂人日記』的危機状態を克服した沈従文は確かに新たに強い精神性を獲得しており、五十年代の彼は歴史への独自の洞察に達していたと考えられ、この時期の書簡を連続的に読むことで、沈従文の前半生までの文学的営為が、より長い時間的スパンと視野において捉えなおすことが可能になる。重要な問題点は沈従文の転業だが、小説家として復帰したい考えは、彼のこの時期の複数対象者への書簡で繰り返し語られ、決してその機会がなかったわけではない。と同時に歴史博物館での日々大量の文物に触れる業務は彼の脳裏を歴代の絹織物刺繍磁器の夥しい形態と図柄紋様で充満させていた。二つの方向性をめぐる揺れは六十年代まで続く。文学作品および書簡と文物考古に関する論文は文体的にも大きく異なるが、同一の時期にひとりの人間により書かれたのは事実であり、後者をその専門性難解さゆえ切り捨てるより、二つの方向性を可能にした沈従文の資質、想像力に目を向けるべきである。彼の書簡に繰り返し現れるのは自己の社会的責任の自覚とともに、生命、自然風景、音、印象等の言葉、そして記憶がある。これらの言葉に注目しながら書簡の分析を報告したい。

Ⅲ　日本漢文部会

Ⅲ－3　「儒者」はなぜ「詞」を作るのか――昌平黌の填詞趣味について

陳　竺慧（大阪大学）

詞（詩余）は、中国では「詩詞」と併称されるほど広く普及した文芸ジャンルであるが、日本では極めて影が薄い。しかしながら詞は、江戸時代の最高学府であった昌平坂学問所（昌平黌）を中心に一時流行を見せたことがある。神田喜一郎の日本填詞史に関する先駆的な労作『日本における中国文学Ⅰ――日本填詞史話　上――』（二玄社、一九六五年）に「昌平黌を中心とする填詞趣味」という一節があるように、昌平黌の少なからぬ儒者たちが填詞に挑んだ。その代表的な存在が「江戸時代に出た最大の填詞作家」とも評される儒者野村篁園（一七七五－一八四三）である。

「儒者」とは文字通り、儒学を研究・教授する人。本発表では特に幕府に仕える官儒を指す。彼らにとって、最大の課題は天下国家の運営について考えることであり、「小技」「小道」の最たるものである詞の創作は本来は二義的な営みに過ぎなかったはずである。にもかかわらず、敢えて詞の創作に手を染めたのは、なぜか。そのことを考えるうえで、ひとつの手がかりになるのは、彼らが「雅正」なる詞を目指していたことである。このとき、彼らが念頭に置いておいたのは中国本土の朱彝尊をはじめとする浙西詞派の創作活動ではないだろうか。それをモデルと仰ぐことで、官儒たることと「小道」に従事することとの間の矛盾を解消していたのではないだろうか。

「儒者」はなぜ「詞」を作るのか。官儒たる昌平黌の文人たちは、なぜ填詞に手を染めたのか。本発表では、明末清初の中国詞壇の動向なども視野に入れながら、昌平黌の填詞趣味について私見を述べてみたい。

Ⅲ－4　泊園書院関係碑文にみる藤澤南岳の実業観

横山　俊一郎（関西大学非常勤講師）

四国高松出身の藤澤東畝によって開かれた泊園書院は、文政八年（一八二五）の開設以来、明治初年の混乱期を除いて、昭和前期に至るまで長きにわたって商都大阪に存在し続けた。またこの漢学塾の門人は多く、二代院主藤澤南岳（一八四二－一九二〇）が主宰する明治期には通算して約五千人が学びに来たといわれている。一般的に、漢学塾は近代教育が浸透するにつれて廃れていく、とイメージされるのであるが、泊園書院に関してはその常識が当てはまらないのである。

では、なぜ近代の泊園書院は多くの人々から支持されていたのだろうか。今のところ発表者は、当時の泊園門人のうち豪農・豪商層に注目している。というのも、幕末期における泊園門人の多数派（儒者・医者・僧侶）には彼らは入っていなかったからである。これまでの考察により、彼らは銀行・紡績・鉄道など近代企業の経営に参画したり、みずから先進的なビジネスを創出したりするなど、実業に熱心であったことが判明している。

本発表では、この新たに登場した泊園門人の多数派の概要を示したうえで、当時の院主南岳が実業そのものをどのように見ていたのかについて検討する。そのさい、『泊園書院関係碑文調査報告書』に掲載された南岳撰による実業家の顕彰碑および墓碑を活用したい。同書には金澤仁兵衛（平野紡績の経営者）や藤本荘太郎（堺緞通の革新者）など著名な実業家の碑文が見られ、それらの記述の中には南岳の実業観が垣間見られるものも存在する。また考察では、碑文に表れた南岳の言説そのものの分析と併せて、『藤澤先生講談叢録』などで示された南岳の思想全体の中でそれらの言説がどう位置づくかについても検討する。

本発表をとおして、実業家に支えられた漢学塾＝近代の泊園書院という可能性を示すとともに、漢学塾の門人層ないしは支持層に焦点を当てたアプローチが、近代漢学の存在形態を解明する一つの手がかりとなることを提起したい。

オンライン開催について

（オンデマンド方式による研究発表について）

オンラインでの大会開催の概要は下記の通りです。

日本中国学会のウェブサイトにて、期間限定で会員のみがアクセスできる研究発表ページを設置します。会員はそこで発表者の発表資料を閲覧し、掲示板機能を使って議論を行う、という形式を採ります。具体的な手順は次の通りです。

（一）日本中国学会ホームページ（http://nippon-chugoku-gakkai.org/）の「お知らせ」に「第72回大会のページ」へのリンクを設置します。そこをクリックしてください。

（二）「第72回大会のページ」に、**10月10日分・10月11日分・総会**など、大会各ページへのリンクを設置します。そこをクリックしてください。**パスワードが要求されますので、入力して**ページに入り、表示される指示に従って閲覧してください。

（三）会員は発表者の発表資料と司会者の書き込みを閲覧し、もし質問がある場合はページ内に設置されている掲示板に書き込みを行ってください。発表者がそれに対する回答をやはり掲示板に書き込むことで議論を進めます。

（四）書き込みにあたっては、必ず所属と名前を入力してください。また、文字数や書き込み回数の制限も設けています。これらに違反している書き込みは、大会準備会側で削除することがあります。詳細については、ページ内に注意事項を掲示しますので、当日はそれを参考にしてください。

（五）大会ページの閲覧および書き込みは、10月10日・10月11日ともにその日の**午前九時から午後六時**までとし、それ以外の時間は公開しないことを予定しています。

（六）映像・音声等の発表資料のダウンロードや、配布文書や発表資料の無断転載・二次配布などはしないようお願いします。

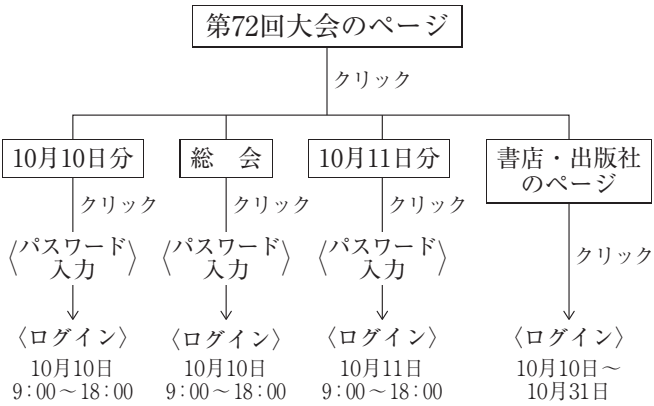
（七）書店のページは、これとは別に一定期間公開することを予定しています。

パスワードは９月下旬に別途郵送します。「第72回大会のページ」の閲覧にあたっては、本要項と合わせて参照して下さい。なお、**パスワードは絶対に外部に漏らさないようにしてください**。特に、不特定多数の方が閲覧できるSNSなどに書き込むことは絶対に行わないでください。もしそうなった場合、掲示板でいわゆる「荒し行為」が発生し、オンラインでの開催を中止せざるを得なくなる可能性があります。

オンライン開催大会の参加方法
10月10日（土）・11日（日）

日本中国学会ホームページ（http://nippon-chugoku-gakkai.org/）

トップページ「お知らせ」



＊パスワードは９月下旬に会員に郵送します。
　部外者には知られないよう御注意ください。

＊大会に関する最新情報は、日本中国学会ホームページにて随時お知らせしますので御確認ください。

〒223-8521　神奈川県横浜市港北区日吉４－１－１
慶應義塾大学来往舎種村和史研究室

日本中国学会第72回大会準備会

E-mail　japansinology72@keiochina.jp